

課題図書を読んで考えた「グローバルシチズンシップ」について

ジャパン未来スカラシッププログラム 2022 年度参加生 野口綾乃

私は昨年高校3年生の時からビヨントゥモローの活動に参加していたが、新型コロナなどの影響により実際にビヨンドの仲間と対面を果たしたのは今年の夏に開催された「スカラー、サマー・キャンプ2022」の時だった。この活動でグローバルシチズンシップとは何なのか、活動で伺った話を元にチームメンバーとディスカッションを重ねたことが記憶に新しい。しかし、夏に私が考えたグローバルシチズンシップの定義と、今回の課題図書である「日本株式会社の顧問弁護士 村瀬二郎の『二つの祖国』」を読んだのち考えた定義は少し違うものとなった。それは私がこの著書を読んで村瀬二郎さんの二つの祖国を持った人生について知ったからである。村瀬二郎さんの生き様こそグローバルシチズンシップに重なるものだと考えた。村瀬二郎さんのどのような要素がグローバルシチズンシップと重なるのか、そこから考えたグローバルシチズンシップの定義とは何か。印象に残っている文を著書から引用しつつ、また私の経験も踏まえ述べていく。

著書を読んでグローバルシチズンシップを実感したのは、日米に跨がる体験により作り上げられた、村瀬二郎さん独特の価値観についての部分だ。「村瀬二郎は最後まで、『自分は日本人で、ニューヨークで生まれ、日本で育ち、アメリカで働き生活してきた。』と自分のことを表現した。」(195頁)の部分、村瀬二郎さんの価値観が含まれた一文だと考えた。彼はアメリカ人の公正、公平な気風を愛し、日本の大和魂を信念とした。アメリカと日本、両国の性質やその国での道理について精通した人物だったと思う。また二つの祖国どちらも大切にしていた。だからこそアメリカ側と日本側、両側の窓口になれる弁護士になったのか、と納得した。価値観だけでなく村瀬二郎さん自身の人柄にも両国の懸け橋となる所以があると実感した。アメリカでロースクールに通いながら、ニューヨークにやって来た日本企業や駐在する家族の面倒を嫌がることなく引き受けたのには、日本人としてのツールを大切にしてきたことと、太平洋戦争を日本で経験したことにより助け合うことがどれほど重要なことなのかを理解しているからだろう。いくらポジションが上がっても難しい依頼、些細な依頼どちらであっても誠心誠意向き合うスタンスは多くの人を魅了しただろう。これらの要素が米国における日本人社会の地位向上、並びに日米の相互理解に並々ならぬ功績を生んだ。

今年の夏のプログラムではグローバルシチズンシップを定義のままに「誰もが地球社会の一員であり、そこに参画する責任を持つ市民だ」という意識」としか捉えていなかった。しかしこの定義をより理解するために言葉を分解すると、地球社会の一員である意識するためには日本だけではなく、世界の状況に目を向けることが第一歩である。地球社会に参画するには失敗を恐れず様々なことを経験し、挑戦へのハードルを下げるのが大切で

ある。参画することに責任を持つということは沢山の人の価値観に触れ、吸収し信念を持つこと、それを全うすることである。著書を読んでグローバルシチズンシップとは上記の定義の他に世界を知り、挑戦し、世界の価値観を吸収することも必要なのだと気付くことができた。

私は高校1年生の時に児童養護施設に入所し、卒業まで施設の子ども達と過ごした。施設に入所していなければ児童養護施設にいる子どもの苦悩を知ることはなかった。施設からの進学が如何に難しいか、親と決別した子どもは施設を退所後生活力もない状態でどのように生活していけばいいのか。これらの問題に実際直面した経験のある私だからこそ施設にいて悩んでいる子どもを助ける「窓口」になれるかもしれない。私の一番辛かった過去の経験が誰かの糧となるかもしれない。私も村瀬二郎さんのように誰かの懸け橋になれるかもしれないと自身の経験と照らし合わせて考えた。彼は私に懸け橋になれる可能性を与えてくれたように思えた。グローバルシチズンシップを備えた人間になるためにももっと世界を知りたい、様々なことに挑戦したい、今までの経験やこれから起こること全て忘れることなく価値観や信念として吸収したいと考えている。達成するためにもまずは今取り組んでいるジャパン未来スカラシッププログラムに真摯に向き合い、大学での授業での学修を大切にする。プログラムも大学も自分でつかみ取った、沢山の人の人々に与えてもらったチャンスであることを忘れずにグローバルシチズンシップ獲得を目指し精進していく。